

唯一、激論の根底にあったものとは

手島 繁一

一九八〇（昭和五五）年の五月だったと思います。わたしは、大学八年、修士課程五年という破格のスローペースで法政大学大学院博士課程にたどり着いて、緊張感から解放された気持ちであったのです。が、そこに指導教授であった中林賢二郎先生から「修士論文を『労働運動史研究』に掲載し活字になさい。ついては、労働旬報社の佐方君に連絡を取りなさい。ちょっとクセがあるが、ベテランの編集者だから万事良いように取り扱ってくれるからね」との電話がありました。スローペースのわたしにとっては珍しく、直ちに佐方信一さんに電話をしました。なにしろ「クセがあるベテランの編集者」を相手にするわけですから、相当身構えて緊張していたことを覚えています。

ところが、電話口の向こうからは「佐方です。中林先生から承っております。どうぞ、あなたが良いと思われるような論文をお纏めください。お待ちしております」と、

やや甲高くも柔らかな声が返ってきたのでした。肩透かしを食った思いでした。もちろん一言一句までは正確ではないのですが、このやり取りの記憶は今でも鮮明です。

これが以後四〇年にわたる佐方さんとお付き合いの始まりでした。

いま思えば、この初発のなかに佐方さんとわたしの関係のありようがすでに示されていたように思われます。佐方さんとわたしは年齢にして一〇年ほどの差があり、その関係は愚弟執筆者と賢兄編集者のようでありました。一九八六年に中林先生が亡くなられた後は、中林先生から出来の悪いわたしを預かり、励ましたりなだめたりしながら、なんとか一人前の研究者にしようと育成者としての己の責務を自覚していたのかもしれない。

とはいえ、決して先輩風を吹かせるわけでもなく、物腰柔らかかに、常に執筆者や研究者を影から支えるという役割に徹した姿勢は、編集者の鏡ともいえるべきものでした。わたくしなど、まだ修業中の大学院生のころから「先生」と持ち上げられ、ずいぶんこそばゆい思いしたものでしたが、その言い方が「センセ」と聞こえるのがわたしには印象的で、往時も今も佐方さんを偲ぶよすがになっています。

ちなみに、この「センセ」という言い方は先年亡くなったわたしの妻・慶子もお気に入り、夫婦の会話でひとしきり佐方さんの話題で盛り上がった折、「あなたと佐方さ

んって、掛け合い漫才兄弟コンビのようね」と評されたものでした。

思い出は尽きませんが、わたしが賢兄のように慕っていた佐方さんと、唯一激論を交わした場面がありました。二〇〇三年一月頃でしたか、大原社研のなにがしかの会議の後、いつものように西八王子駅前「金太郎」で打ち上げ飲み会があったことです。どういう話の巡りかは覚えていませんが、翌二〇〇四年のNHK総合の大河ドラマが「新選組」になったということが話題になったとき、佐方さんが珍しく声を荒げ、「新選組のとき反革命集団を国民的ドラマの主人公にするとは何事か！」と、憤激の弁をまくしたて始めたのでした。

穏やかで物静かな佐方さんの人柄に慣れ親しんでいた酒宴の場の人々はびっくりして、しばらくは一同じつとその弁を聞いていました。が、おそらくその沈黙を破って最初に反論に出たのはわたしだったと思います。明治維新論、薩長史観など歴史学上の重大論点が含まれる論争の一端ではあったのですが、なにしろ酒宴の席ですから話は奔放にあちこちに駆け巡り、結果としては爽快な対論となったとの記憶があります。

後から考えると、佐方さんの薩摩っ子としての根っ子が良くわかる立論でした。わたしがいち早く反論したのは、これまたわたしの根っ子が「賊軍の子孫」であつたからでした。この当時は不明だったのですが、その一〇年後、わたしの縁戚だとする宮城県在

住の方から、手島一族は仙台藩岩出支藩の重職の家系である、との手紙が舞い込みました。わたしの父方の祖父は確かに宮城県から北海道への移住者で、県内有数の大族の流れではあるのですが、何らかの問題を起こして現地におられず渡道したらしい、という情報も添えられていました。

とはいえ、「薩長官軍」に立ち向かった「賊軍・奥羽越列藩同盟」の出であることには違いがないのです。どうやら、「新選組」をめぐる対論は、「薩長官軍」と「賊軍」の子孫のDNAが時空を超えて遭遇したことによるものかもしれません。

佐方さん。

いずれそう遠くない時間、わたしもそちらに参ります。妻・慶子とせいぜいわたしの悪口でも言い合ってお待ちください。

（元法政大学大原社会問題研究所兼任研究員・元法政大学社会学部講師）